
世界樹のはやぶさ

吉良義人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹のはやぶさ

【Nコード】

N0338BA

【作者名】

吉良義人

【あらすじ】

世界にそびえ立つ、途方も無く巨大な樹、世界樹。

人々はその世界樹の中に出来ている穴を通って、世界樹の頂を目指して進んでいく。人々はこのいった者たちを冒険者と呼んでいた。

そんな中、過去にあった出来事から世界樹を避ける者がいた。

その者はある時を境に、再び世界樹を上り始める。

その者の名前はハヤト。

ハヤトは再び登る世界樹で何を見、そして何を考えるのか――。

第一話 出会い（前書き）

初めまして、この作品の作者の吉良義人です。

今回の作品は、僕にとっての初投稿となります。

まだまだ至らないところがあるとは思いますが、よろしく願います。

第一話 出会い

新聞や食器、パンといった物が所狭しと机の上や棚に置かれた部屋の中。それぞれの品の前に値札がある事から考えるに、恐らく雑貨店かそれに類似した店だろう。

その雑貨店の中、一人の少女が不機嫌そうに、机の前に置かれていた椅子に腰かけていた。

その少女は普通の服の上から、人体の急所となる、胸や腹部といった所のみを覆う鎧を身につけている。また、その腰には細身の剣が吊るされており、人目で戦う事を生業としているのだと分かる。

顔は美しく整っており、目が大きいこともあって人に活発そうな印象を感じさせる。彼女の後頭部で一つに束ねられた栗色の髪の毛は子馬の尻尾を連想させ、活発そうな印象を強めている。

普段なら明るい笑顔を浮かべているのであるうその顔を、少女は現在、不機嫌そうにしかめ、唇を尖らせていた。

そんな少女に苦笑いを浮かべた男が、部屋の奥から出てくる。

不機嫌そうにしている少女よりもよっぽど戦いに向いていそうな厳つい顔と、刈り上げたのか、光沢を放ってキラキラと輝く坊主頭がよく似合っている。

「テナちゃんよう……。一応、今は商売中なんだけど……」

厳つい顔の割りに、情けないような弱々しい声を出したその男を、テナと呼ばれた少女はむう、と見上げた。

「……その割りに、お客さんは来ていないのね？」

「あたっ！ 痛い事言われたなあ……」

少女の言葉に顔をしかめたその男は、真面目な顔になってテナを見る。

「……アリアちゃんとはいつ仲直りするんだい？」

「知らないよ、あんな奴……」

男の言葉に、反抗するような言葉を言いながらも、テナの顔は少

し陰りを見せる。

後頭部で束ねられている髪も、心なしか萎れているように見える。そんなテナの様子に、やれやれと肩をすくめながら、男は話を変える。

「それで、パーティーを組んでくれる人の目星はついたのかい？」

「……いいや。即戦力になりそうな人は一人も……」

そう言ってから、テナは「はああ……」と、深く息を吐く。

そんなテナを見つめていた男だったが、何か良い事でも思いついたのか、ニヤツ、と人の悪い笑みを浮かべる。そして、あくまでさりげなく話し始めた。

「……そういえば、俺の昔の知り合いに一人、世界樹攻略をやっていた奴がいてな……。今は現役引退をしているんだが……」

男の言葉に、机にべったりと倒していた顔をガバツ、と音が出そうな勢いで上げたテナは、男に尋ねる。

「……その人の事、教えてくれない？」

そんなテナの様子に、心の中でニヤリと悪い笑顔を浮かべながらも、実際はいつも通りの表情を作って、男は言葉が続ける。

「ハヤトって野郎なんだがな、そいつが冒険者をやっていたのは2年前までだ。俺が冒険者として戦っていたときに、俺のチームのリーダーだった野郎だ。俺が知る中じゃあ、そいつは一番強かったな」

「……その人、今何歳？」

「今か？ あの時はいくつだったから、今は19かな？」

テナの質問に答えた後、初めて男はニヤツ、と顔に笑みを浮かべる。そしてテナの方に顔を寄せ、秘め事を話すときのように、小さな声でテナに尋ねる。

「……そいつの住所、教えて欲しいか？」

男の言葉に、テナはこくこくと勢い良く頷く。

素直な娘だなあ、と思いながら、男はそのハヤトの住所をテナに伝える。

それを聞き終わった瞬間、テナは勢い良く部屋を出て行き、先程

とは違うたつたと元気な音を立てながら走っていった。
少女の走っていく音を聞きながら、男は小さく呟いた。

「……ハヤト……。お前が責任を負うことなんて、無いんだぜ……」
そう呟いた男の顔は、何処か悲しげでもあった。

× × × × × × × × × ×

「はあ、はあ、はあ。……ここが……」

恐らく走ってきたのであろう、息を切らしたテナは、一軒の家の前に立っていた。

その家は、割合綺麗に整備されているものの、そこら辺の家との違いのよく分からない物だった。

冒険者という仕事は、他の職業と比べると収入はかなり多いため、その住居は結構大きなものである事が多いのだ。

そのためやはり、その家の周りに立ち並ぶ家の中には、明らかに大きなものも存在する。

これには冒険者の職業がどういう物かという事がかなり関係してくるのだが、この話は後にしよう。

軽く息を整えたテナは、手をゆっくりと上げ、その家の扉を叩いた。

5秒、10秒と経過し、もう一度扉を叩こうかとテナが思い始めた頃、中から声が聞こえてくる。

「……はい、何でしょう？」

「私、テナ＝レスターといいます。ハヤト＝シラキさんですか？
あなたに話があつて来ました」

テナの言葉に、ゆっくりと扉が開かれる。

武装しているテナの姿に、目を鋭くさせる青年。明らかにテナの事を警戒している。

しかしテナは、青年のその姿に対して驚きを感じていた。

雑貨店の男から聞いていた情報では、ハヤトという青年は2年前

まではかなりの腕を持つ冒険者だったらしい。それが突然冒険者を止めたのだから、つきりテナは、ハヤトは腕や目を失っていて、義手なり義眼なりを使っているものと考えていたのだ。

それが実際は、ハヤトは義手や義眼がないどころか、特に特徴の見当たらない、いたって平凡な風貌の青年だったのだ。あえて特徴を挙げるとするならば、その髪が、ここら辺ではあまりいない黒だったことだろうか。

本当にハヤトという青年は冒険者だったのか、心の中に不安が芽生えるテナだったが、すぐにこの考えを取り消す。

人を見た目で判断するのは、愚かな行為だという事を思い出したからだ。

「2年前まであなたが冒険者だった事を聞いて来ました」

テナの言葉に、ハヤトは明らかに目付きを険しくさせる。

何かを言おうとしたハヤトだったが、何を思ったのか、開きかけた口を閉じる。

恐らくはここでテナを追い返して、余計な騒ぎを生み出すことは避けようと考えたのだろう。

「……どうぞ、入ってください」

と、テナを自分の家の中に招き入れた。

家に通されたテナは、その家が意外と綺麗に整えられていたことに驚きながら歩く。

ハヤトに連れられてロビーまで案内されたテナは、話を切り出した。

「私が話したいのことは、一つだけです——」

テナの言葉に、ハヤトは怪訝そうな目を向ける。「何を言い出すんだこいつは？」とでも言いたそうな顔である。

それを無視して、テナは言い放った。

「——私と、パーティーを組んでください！」

第一話 出会い（後書き）

どうも、吉良義人です。

この作品が初投稿なので当然ですが、小説の後書きを書くのも今回が初めてです。

何を書こうかな……？

とりあえず、今回の作品について少し。

今回の字数は2000文字を少し越えた程度でしたが、次回からは5000文字以上を目標に書いていこうと思っています。

また、この作品の投稿は一週間ごとの予定です。

ですので、次回の投稿は一週間後の1月8日の午前0時を予定しています。

では、そろそろ締めを。

この作品「世界樹のはやぶさ」をこー読んでいただき、まことにありがとうございます。

作者はこの作品についての批評や感想、気になった事なども大歓迎の姿勢で臨んでいくつもりですので、気軽に感想欄に書き込んでください。

では、今回は本当にありがとうございました。

第二話 結成（前書き）

まず初めに謝罪を。

「作品の投稿は一週間ごと」とか第一話の後書きで書きましたが、不定期更新になりそうです。

……現に、1月8日になっていないのに、第二話を投稿していますから……。

改めて書かせて頂きますと、作品の投稿は不定期。しかし、少なくとも一週間に一話投稿という形にさせて頂こうと思います。

それでは第二話、よろしく願います。

第二話 結成

「私と、パーティーを組んでください！」

そう言つて頭を下げたテナに、ハヤトは驚きの混じつた顔を向けていた。

冒険者という職業は、その仕事の関係上、その立場はかなり高いものになる。そのため、冒険者が一般の人間に頭を下げるといった事は、珍しいもののなのだ。

「……テナ・レスターさんと言いましたか、頭を上げてください」

ハヤトの言葉に従つて頭を上げたテナは、ハヤトのことを真剣な顔で見つめてくる。

思わずテナと目を合わせてしまったハヤトは、テナの瞳の奥に不安と、焦りのようなものが見えた気がした。それを認識すると同時に、ハヤトは強い既視感を感じる。だが当然、ハヤトとテナは初対面の間柄である。

「……どうして、僕となのですか？ ……僕なんかより適任の冒険者は、他にもたくさんいるでしょう？」

自分の頭をガンガンと鳴らすその既視感に眉間をしかめながら、ハヤトはゆっくりと言葉を紡いだ。

ハヤトの言葉に少し俯いていたテナは、小さく呟いた。

「……他の人たちには、みんな断られました……」

そう言いながら、テナの表情はどんどん沈んでいく。それを見たハヤトの心の中には、どこか居心地の悪い感情が芽生えていた。いふなれば、罪悪感、といった感情に近いものだ。

テナの言葉から察するに、自分は最後の砦か、もしくはそれに準ずる物なのだろう。となれば、かなり断り辛くなってくる。自分がテナの頼みを無為に拒めば、少女は必ず落胆し、その顔を曇らせるであろうから。

本当につい先程出会ったばかりの少女だが、この少女を悲しませ

る事を、自分の心は防ごうとしていた。先程感じた既視感が、その感情を生み出したのだろうか。

そんな事を考えながら、ハヤトはテナに尋ねる。

テナの言葉だけでは、自分の所に来た完全な理由にはなっていない。

「……僕が冒険者だった事は、誰から聞いたんですか？」

「……エレック雑貨店の、店主、エレック・オリマーからです」

テナの告げた名前を聞いた瞬間、ハヤトは自分の頭を抱えて、座り込みたくなった。

エレック・オリマー。かつてはハヤトの仲間のものであったその名前は、ハヤトに懐かしい感覚を味あわせる。エレックであれば、自分の住所を伝えることなどは造作も無いだろう。

だが、エレックは若干、間の抜けたところのあった青年であったが、それ以上に慎重な性格だった。そんな彼が、容易に人の、しかもかつては仲間だった者の名前を伝えるとは思えない。

なんらかの、エレックの思惑が存在すると考えていいだろう。

テナの頼みを聞くつもりは無かったが、そこにエレックが絡みだすならば話は別だ。

はぁ、と息を吐いて、ハヤトはテナに告げる。

「分かりました。あなたの言う通り、あなたとパーティーを組みましょう、レスターさん」

ハヤトは頼みを断るものだと思っていたのだろう。

ハヤトの答えを聞いたテナの表情はどんどん明るくなっていき、顔に大きな花が咲いた。

「ありがとうございます！」

テナの言葉を聞きながら、ハヤトは一言、付け足そうとする。

「……レスターさん、あなたも知っています——」

「あ、私の事はテナ、で呼んでください。苗字で呼ばれるのは慣れていないんです。それと、私に敬語を使うのも。すごくむず痒いです」

テナはにこにこと、そう言った。人に苛立ちを与えない、とても気持ちの良い笑顔だと素直に感じる。先程までの沈んでいた表情が？みたいだ。

他人を下の名前で呼ぶのはいつぶりだろうか、という事をぼんやりと考えながら、ハヤトは改めてテナに告げた。

「……テナ。お前も知っているだろうけど、僕は2年前に引退している。だから、あまり期待はしないでくれよ？」

「はいはい。分かりました」

……本当に分かっているのだろうか？ と、ハヤトの言葉を聞いても少しも表情を変えず、相変わらず笑っているテナに、ハヤトは若干の不安を感じる。

とりあえず話はまとまったため、ハヤトはテナを戸口まで送っていく。

「……今日はもう夜になるから、明日の昼頃にエレクトクの店で集合にしよう」

「はい、分かりました。じゃあ私は帰りますね」

その言葉と綺麗な笑顔を残して、テナはあつという間に去っていく。

ややそんなテナの勢いに呆然としながら、ハヤトは自室に戻る。その途中、ハヤトは心の中で自問自答をしていた。

結局、何故、自分はテナの頼みを引き受けたのだろうか？ エリツクの知り合いだから？ だがそれも動機としては弱い。ただ、あのテナという少女を放っておくのが、何となく躊躇われたのだ。

自分の感情に、これまでに無いほどの戸惑いを感じながら、ハヤトは自室のベッドに倒れこんだ。

× × × × × × × × × ×

世界には、一本の巨大な樹が立っていた。
頂上が地上から見えないほど大きなその樹は、人々からは「

世界樹」と呼ばれていた。

その世界樹は不思議な事に、人の持てる力の全てを尽くしても、皮に傷一つ付けることが出来なかった。

また世界樹の中に、地上から入れる空洞を見つけた人間は、その空洞を探検し、そして幾つもの発見をした。

その空洞は、世界樹の上へ上へと続いている事。そして、その空洞の中には、不思議な力を持った数多の動物が生息しているという事だ。

その動物を人間は「魔物」と呼び、多くの人々は世界樹の空洞を通っていく事で、世界樹の上へ行こうと試みる者が多数、現れた。彼らは互いに手を取り合って、世界樹の攻略を現在まで続けている。この攻略者たちは、一般的に「冒険者」と呼ばれるようになった。

人類に理性が生まれ、互いに手を取り合うようになってから長きに渡って攻略され続けていたが、未だに世界樹の頂上を見てきた者は、誰もいない。

いつしか、世界樹の頂上は神の住む神聖な領域である、という話まで生まれるようになったのである。

× × × × × × × × × ×

ハヤトと出会った次の日、テナは昼前にエレック雑貨店へと向かっていた。

ハヤトの言う「昼頃」を、一般人が昼食を食べる頃の間と認識したテナは、ハヤトを待たせまいと、集合より早く到着するようにしたのだ。

テナがエレック雑貨店の前まで来たとき、中から賑やかに談笑する声が聞こえてきた。

エレックの店は、お世辞にも客入りの良い店とは言えない。要はあまり繁盛していない店のため、談笑の声が聞こえてくるのはかな

り稀であつたりする。

誰か来ているのだろうか、と思いながら店の扉を開けたテナは、予想外の光景を目の当たりにする事となった。

エリックとハヤトが、楽しみに談笑していたのだ。

いや、エリックとハヤトは2年前までチームを組んでいたのだから、こういった光景はあつても当然なのだが、ハヤトよりも早く来ているつもりだったテナにとっては、こういう光景は予想外のものなのだ。

「おつ、テナちゃんか。思った通りの時間に来たな」

店に入ってきたテナに気付いたエリックが、挨拶をしてくる。

それに気が付いたハヤトも、テナを視界に納めると、軽い会釈をしてきた。

「あ、こんにちは……」

自分の方がハヤトよりも遅かったのが、少し悔しいような気がするが、約束通りに来てくれた事が少し嬉しいような気もし、若干複雑な気持ちになっていたテナは、はっきりと返事を返す事が出来なかった。

その時、目に入っている光景に若干の違和感を感じたテナだったが、すぐにその原因が判明する。

ハヤトが武装していたのだ。

テナの武装と同じく、普通の服の上から、体の急所のみを覆うタイプの鎧を身につけている。腰には、やや細身と感じられる程度の剣が一振り、吊るされている。

一目で使い込まれていると判断できる鎧を身につけたハヤトの姿は、歴戦の冒険者だと言われれば納得できるだけのそれになっていた。人である以上、身につけている物が変わってくると、その印象も大分変わってくるものである。

そんなどうでもいい思考を外に追い出しつつ、テナはハヤトに話しかける。

「すみません。待たせましたか？」

「いや、僕が好きで早く来ただけだから、気にする事はないよ」

本当に、昨日のときは接客のための柔らかい言葉だと感じていたのが、鎧を着るだけで頼れるリーダーのような感じを漂わせるのだから、身につけている物というのは重要である。

「……それで、今日は第何層に行くんだい？」

「あ、今日はとりあえず第10層のテストまで行こうと思います」

テナの言葉に、ハヤトは「それが妥当なラインか」と呟き、そしてテナに対して頷いてみせた。

世界樹の内部には途方も無く巨大な空間が広がっているが、その空間が幾つもの巨大な板のような物で仕切られているのだ。

これを便利に思った人は、その仕切られた空間を下から順に第1層、第2層、第3層……、と名称を付けていったのだ。

そして、世界樹はかなり巨大だとは言っても、やはり樹であるため、無数の枝が存在する。

世界樹の内部から行く事の出来た枝の上に、人は世界樹攻略の拠点となる街を幾つも築いてきたのだ。

つまり、第10層のテストは、世界樹第10層から行く事の出来た枝の上に築かれた街なのだ。

攻略の方針がまとまったハヤトとテナは、エレックに別れを告げて、店の外に出る。

「……さて、あまりゆっくりしていても仕方が無いからな。そろそろ世界樹に行くか」

「……え？ 教会には行かないんですか？」

テナから返された疑問の声に、ハヤトは少しの間、ポカンと間の抜けた顔をした後、

「……ああ。そうだったな、悪い。俺は信者じゃないから……」
と、思い出したように言った。

そんなハヤトの様子に不思議そうな顔をするテナだったが、やがて納得したのか、教会の方へと歩き出した。

冒険者という仕事は必然的に命をかける事となるため、大抵の冒

険者はウエルン教と呼ばれる宗教の信者となつて、教会へと赴き、攻略から無事に帰還できることを祈願していくのだ。

ただ、それも冒険者全員が信者というわけでは無いため、ハヤトは信者でない冒険者の一人だったのだとテナは解釈したのだろう。教会の方へと歩いていく二人を、特に客も来ないため暇なエレックは見送る。

「……教会、か……」

そう呟いたエレックの声は、街の人々の喧騒の中に飲み込まれ、ハヤトたちに届くことは無かった。

第二話 結成（後書き）

今回は特に書く事もないですが、小説に関しての批評や感想、気になったことなどは大歓迎ですので、どんどん書いて頂けると幸いです。

それでは、この「世界樹のはやぶさ」を今後も引き続き、よろしくお願いします。

第三話 実戦（前書き）

どうも、吉良義人です。

何か無理をして書き進めてみたら、一日連続投稿が出来てしまいました。

こんなペースでの投稿は……身体にきついものがありますね……。では前書きもこの位にして、本編をどうぞ、よろしくお願いします。

第三話 実戦

世界樹の根元に広がる街は、エーレンと呼ばれている。

エーレンの街は、世界樹を囲むようにして出来ている巨大な街で、その内部構造は大きく分けて5つになる。

一般人や冒険者の住む「居住区」、商人たちが商売をする「商業区」、貴族たちの屋敷が立ち並ぶ「特級区」、冒険者を志す若者や、世界樹の研究をする学者の住む「学園区」。そして、ウェルン教の信者が教会などを立ててきた「神殿区」だ。

世界樹攻略成功の祈願をすべく、教会へとやって来たハヤトたちは、その神殿区にいた。

神殿区の中でも特に大きなエーレン大聖堂と呼ばれる教会の前に来たテナたち。テナはそのまま教会に入ろうとするが、ハヤトは教会の前で立ち止まった。

「……？ どうしたの、ハヤトさん？ 早くお祈りしちゃうよ」
急に立ち止まり、そのまま動こうとしないハヤトに、テナは疑問の声をかける。

「……ごめんテナ。僕は信者じゃないから。ここで待っているよ」
ハヤトの言葉に、テナは再び声をかけようとする。ウェルン教には信者でなければ入ってはいけないなどという規則は存在しないからだ。

しかし、ハヤトの顔を見ているうちに、テナはその気持ちが薄れてくるのが分かった。

「……分かった。じゃあちょっと待ってて」
そう言い残して、テナは教会の中へと駆け込んでいく。

その後姿を見送ったハヤトは、教会の壁に背中を預け、世界樹を見上げる。この教会からは、ちょうど良い感じで世界樹を拝めるのだ。

世界樹は途中で幾つもの枝を生やしながら、その巨大な幹を伸ば

しており、遙か空の高い所にその頂が存在している。頂には濃い緑色が深く茂っており、枝の先には街のようなものがあるのが分かる。枝の先に出来ている街の中で一番低い位置にある街。それが今日の目的地、第10層に存在するテストだ。

それをしばらく見つめていたハヤトは、やがて世界樹の頂を見つめ、小さく呟く。

「……神の住む樹、世界樹か……」

そして何か古い記憶を思い出そうとするように、ハヤトは目を閉じた。

× × × × × × × × × ×

その後、教会から出てきたテナと合流したハヤトは、世界樹の前まで来ていた。

教会からは全貌を確かめることも出来た世界樹も、その目の前まで来ると頂などは見えない。深い緑色が茂っていることが分かる程度だ。

世界樹の根元にぽっかりと空いた穴からは、かなり不気味な空気が流れ込んでくる。この穴の中を通って行って、冒険者たちは世界樹の頂を目指すのだ。

一般人なら怯えるであろう不気味な空気も、冒険者にとっては慣れ親しんだものでしかない。一部の熟練の冒険者にとっては、その雰囲気かなりの興奮を促すらしい。とはいえ、やはりこういった空気を目の当たりにすると緊張するものである。

「……さて、そろそろ行くか」

ハヤトの声に、テナはこくと頷く。

来る前まで見せていた明るい笑顔は消え、その顔には緊張が浮かび、表情は固くなっている。

「あまり固くなるなよ」

ハヤトの言葉に、テナは顔をぺたぺたと触り、揉みほぐそうとす

る。そんなテナの様子が何となくおかしかったハヤトは、小さな笑みを浮かべる。それを見たテナは照れたような笑みを浮かべ、頬をかく。

ここまでの流れで緊張が大分ほぐれたのか、先程までよりも断然余裕のある表情で、ハヤトとテナは世界樹の中へと入っていった。

世界樹に入ったハヤトたちの目にまず入ってきたのが、ぼんやりと発光する数多の石や苔、虫だ。

世界樹の中は当然洞窟のようになっており、光のような物はほとんど入ってこない。だが、こういった発光するもののおかげで、冒険者は比較的明るい中で、攻略をする事ができるのだ。

その中を歩いていくテナの手には、一枚の地図があった。

この地図には世界樹内部の構造が図示されており、1層ごとの面積が異常な程広い世界樹の中では必需品となっている。

世界樹攻略では必需品なその地図だが、当然、冒険者が攻略を済ませていない所は書かれていない。

この世界樹内部の地図を作るための測量などを行うのは、世界樹攻略最前線で戦う冒険者たちである。

未知の地を歩いていく、という行為は危険であるため、世界樹攻略には本当の実力者しか集まらない。

しばらく歩いていったハヤトたちだったが、その目の前に、数匹の、犬のような形をした動物が現れた。が、普通の犬にしてはその目は酷く濁っており、口からばたばたと涎を垂らしている。

「グルルル……」

「……魔物が……」

そう低く呟いたハヤトは、腰の剣を抜き、その魔物に構える。そんなハヤトに遅れて魔物の存在に気が付いたテナも、急いで地図を懐にしまい、剣を抜いて構える。

既に戦闘態勢を整えたハヤトたちに向かって、一匹の魔物が飛び掛る。

その動きは速かったが、目を見張るほどでもない。

冷静にそれを見切ったハヤトは、魔物が飛び掛ってくるのに合わせて足を振り上げ、魔物の顎を蹴り上げる。「きゃうん」と悲鳴を上げた魔物の声を無視し、魔物の顔面から腹部にかけて剣を斬り下ろし、魔物の息の根を止める。その途中、ハヤトの手に脆い石を砕くような手応えが伝わり、その感覚にハヤトは少し笑みを浮かべる。ふと、もう一度魔物の方を見ると、もう一匹がテナの方へと飛び掛っていくのが見えた。

が、テナはそれを軽くないなして、斬り伏せた。

この調子なら、テナの方も心配ないだろうと判断したハヤトは、再び、飛び掛ってきた魔物を斬り伏せていく。

× × × × × × × × × ×

「……よし、魔物はこれで全部か。早く行こう、テナ」

そう言ったハヤトは、すたすたと歩き始める。

魔物、というのは、世界樹の中を闊歩する存在で、その身体には魔結晶と呼ばれる石が埋め込まれている。

この魔結晶についてはまだまだ謎の多い部分があり、研究者たちの中では一つの課題となっている。これまでの研究で分かっていることといえば、魔結晶の硬度と魔物の強さは比例するような関係にある事、ただそれだけだ。

というのも、魔結晶が万全の状態で研究者の元に届けられない事が関係している。

魔物とは魔結晶を核として誕生した存在だ。そのため、その存在を消滅させるには、魔結晶を割るなり砕くなりする必要があるのだ。当然、魔結晶の欠片を研究者たちに届けるのは、冒険者の仕事の一つだ。

この魔結晶は高値で取引されているため、冒険者の私財が潤っている理由は、ここにあったりする。

すたすたと歩いていくハヤトの後姿を見ながら、テナは一つの疑

問を抱き始めていた。

エレックの話では、ハヤトは凄腕の冒険者だったらしい。そう呼ばれていた時期から2年間、普通の人間として暮らしていたとしても、今魔物と戦っていたハヤトの腕は普通すぎた。

確かに、危なげも無く魔物を葬っていくハヤトの腕前は、冒険者としては十分なそれだ。しかし、だとしても平凡すぎる強さではなかったか。

本当に、ハヤトはエレックの言う通り、凄腕の冒険者だったのだろうか？ 本当は、自分がエレックに騙されているのではないか。

そんな疑問がテナの頭の中を駆け回り、テナは立ち尽くしていた。そのため、

「……………テナ……………おい、テナ？」

「……………へ、何？」

いつの間にか戻ってきていたハヤトの言葉を聞き逃し、テナは思わずハヤトに聞き返す。

「へ？ ってお前なあ……………」と、何やら呆れていたハヤトは、再びテナに尋ねる。

「だからな、現在地がどこか、教えてくれないか？」

「あ。うん……………」

ハヤトの質問に対し、懷から地図を取り出して、現在地を答えようとするテナ。しかし、そこでテナの動きが停止した。

先程まで頭の中を駆け巡っていた雑念のせいで、自分たちがどう通ってきたのかがい思い出せないのだ。

「……………テナ？」

「あ、うん。えっとね……………」

ハヤトに事の真実を伝えようと、意を決したテナ。

「……………わ……………」

「……………わ？」

「……………分かんなくなっちゃった」

そう言った後、可愛らしく、頭を横から小突く仕草をして「てへ

つ」とまで言うテナ。

「……………」

「……………」

「……………じゃ……………」

「……………？」

その場を包んだ長い沈黙の後、目を伏せながら小さく呟いたハヤトの言葉が聞き取れず、小さく首を傾げるテナ。

その直後、世界樹の中を、ハヤトの雷のような大声が轟き、響き渡る。

「『てへっ』じゃないぞー！ー！！」

「わーっ！ 本当にごめんなさいーっ！！」

× × × × × × × × × × × ×

日はすっかり沈み、空は夜の色にどっぷりと沈んだ頃。

世界樹第10層から延びる枝の先に出来ている街、テストの入り口に、二人分の人影が現れた。背の高い者と、低い者の二人だ。どちらも、その姿から疲れたような雰囲気が出ている。

「……………もう大分暗いぞ……………」

恨みがましい声を上げたのは、背の高いほうの人影、ハヤトだ。

その声を聞いて縮こまっている背の低いほうの人影は、当然テナだ。

「……………すみません」

テナの、もはや涙声となりつつあるその声を聞いたハヤトは「はあ……………」と、大きなため息を吐く。

「……………本当なら、暗くなる前には着くはずだったんだけど……………」

そう言ったハヤトは、再び「はあ……………」と大きなため息を吐き、後ろで縮こまっているテナの方を向く。

「……………もう夜になったからね。早いとこ、夕食にしようか」

ハヤトの言葉に、テナは大きく頷く。

そのまま二人がテストの食堂の方向へと歩き出そうとした時、

「……あら？　そこにいるのは、テナ？」

という少女の声が、二人の耳に入ってくる。

「うん？」と言いながらテナの方を見るハヤトに対し、テナはその声の主の方を見つめて動かない。

「……アリア？」

テナに声をかけた少女、アリアは、テナの言葉に大きく頷いた。

第三話 実戦（後書き）

「世界樹のはやぶさ」の弾三話、如何だったでしょうか。

割と頑張ってみているつもりですが、まだまだ至らない所は無数に存在していると思いますので、ご指摘などありましたら、感想として書き込んでいただけると幸いです。

では、今回はこのくらいで切り上げます。

次回の更新の際もご一読して頂けると幸いです。

第四話 再会（前書き）

こんばんは、作者の吉良義人です。

今日（昨日）の夕方、この作品を数名の方がお気に入り登録を下さっている事が分かって、少しテンションが上がっています。やっただー！

それでは第四話、どうぞよろしくお願いします。

第四話 再会

「……アリア？」

テナの言葉に反応して、テナに声をかけた少女、アリアはハヤトとテナの前に出てきた。

その顔は美しく整っており、丁寧に整えられた金の髪、澄んだ大きな碧い瞳、そして品の良さが伺える立ち姿が、ハヤトに薔薇のような華やかさを感じさせていた。

「……ほう………」

アリアの美しさに思わず息を吐いたハヤトに対し、テナはアリアを直視せず、やや視線を落としている。

そんなテナの様子に構わずに近づいたアリアは、テナに言った。

「こんにちはテナ。またあなたと会えて嬉しいわ」

そう言っただけのアリアは、人が見惚れてしまうような美しい笑みで、テナに笑いかける。しかし、テナはそれでもアリアの方を見ようとせず、視線を落としたままだった。

さすがにテナの様子に異変を感じ取ったハヤトは、テナとアリアの間に体を滑り込ませるようにして、アリアと向かい合う。

「こんにちは。アリアさん、ですね。テナとはどういう関係ですか？」

そう言っただけのアリアを睨みつけるハヤトに対し、アリアは、先程までの美しい笑みを消して、不機嫌そうな顔になっている。

「……あなた、誰ですか？」

「僕はハヤト」シラキ。テナとは現在、パーティを組んでいます」ハヤトの言葉を聞いた時、アリアは一瞬、驚いたような顔をして、ハヤトの後ろにいるテナの方を見る。そして、少し唇を噛み締めて俯いた。

そんなアリアの様子に、不思議そうな表情をしたハヤトだったが、

表情を元に戻す。

「さて、そろそろ僕の質問にも答えて頂きたい。テナとは、どういう関係ですか？」

ハヤトの言葉に、アリアはきつ、と表情を引き締め、そして答えた。

「私はアリア＝フェルノ。そちらのテナとは、以前、パーティを組んでいました」

「……………へえ？」

アリアの言葉に、間の抜けた声を上げながらハヤトは、後ろに立っているテナの方を見る。すると、テナはハヤトに小さく頷く。

「どうやら、アリアの言っている事は本当の事らしい。」

「……………以前、っていう事は、今は組んでいないのですよね？」

ハヤトの確認するような言葉に、アリアはこくりと頷く。

さて、次は何を言おうか、と考えているハヤトに、アリアは小さな声で尋ねた。

「……………突然で申し訳ないのですが、明日、あなたたちは何処まで行くつもりですか？」

アリアの唐突な質問に、目を若干、白黒させながらハヤトは答えた。

「……………一応、第21層にあるカナレアの街まで行くつもりだけど、実際はどうなるか分からないかな」

ハヤトの答えを聞いたアリアは、少しの間、目を伏せていたかと思つと、「よしっ」と小さく呟き、そしてハヤトに正面から向き直つた。

そのアリアの瞳からは何やら強い決意のようなものが感じられ、ハヤトは思わず身構えてしまう。

そんなハヤトに構わず、アリアは二人に言い放つた。

「明日のあなたたちの攻略に、私も同行させて頂きます！」

「……………へ？」

アリアの予想外な言葉に、ハヤトとテナは同時に間の抜けた声を上げてしまう。

ハヤトは、何が何やら分らない、とても言いたそうな顔をしており、テナは口を小さく開けている。

二人の頭の中が混乱して、何も言えなくなっているのを良い事に、アリアは矢継ぎ早に言葉を繰り返す。

「というわけで、明日の昼前、此处に私はいますので、ちゃんと来て下さいね」

そう言ったアリアは、すたすたとテストの宿屋のあると思われる方へと歩き去っていく。

「……………何だったんだ……………」と小さく言葉をこぼすハヤトだったが、やがてテナと食堂の方へと歩き出そうとする。しかし、

「……………戻ってきたよ」

テナの言葉に、ハヤトは立ち止まり、アリアの来る方向を見る。

ハヤトたち……………いや、ハヤトの前まで来たアリアは、突然、ハヤトの方に顔を寄せてくる。

アリアの美麗な顔が急接近してきた事、そしてアリアの髪から仄かに香る、花の香りに似たそれが、ハヤトの胸を高鳴らせる。

テナが「あつ」と何やら驚いたような声を上げているのに対し、ハヤトはギチツと硬直してしまっている。

しかし、そんなハヤトの胸の高鳴りも、次の瞬間には止められていた。

「……………明日、来なかった時は……………。分かってますね？」

恐ろしいほどに迫力に満ちて、もはや脅迫じみているアリアの言葉を聞いたハヤトは、無言でこくこくと頷く。

ハヤトの返事に満足したアリアは、ハヤトから離れ、先程向かうとしていた方向へと歩き始めた。

アリアがもう戻ってこない事を確認したハヤトは、少し残念そうに見えなくもない顔で、テナに言った。

「……………とりあえず、夕食にしようか」

少し頬を赤らめていたテナの顔が、ハヤトには印象的だった。

× × × × × × × × × ×

テストの中心近くに位置する、そこそこ大きな食堂。

世界樹攻略から帰還した冒険者たちが騒いで、活気に溢れている
その一角に、ハヤトとテナの二人の姿があった。

「……………さて、テナ。さっきの奴との関係、詳しく聞かせてくれな
いか？」

机に並べられた料理を少しずつ食べながら、ハヤトはテナに尋ね
た。

ハヤトに尋ねられたテナは、ゆっくりと、話し始めた。

「……………アリアとはね、エーレンの学園区で会ったのが初めてかな。
同じ組にいたのが長かったから、学園を出た後も二人でパーティを
組んで、一緒に世界樹に行っていたの」

エーレンにある学園区では、冒険者になる事を志望する若者を、
冒険者として活動できるように育成する。その過程で一緒に鍛錬し
てきた者とは、当然、初対面の者よりも息が合う。そのため、冒険
者として活動し始める者は、同じ学園区で育った者と組むことが多
いのだ。

「結構上手くいつていたんだけど、ある時、アリアが攻略で怪我を
したの。あまり大きな怪我じゃなかったんだけど、その時、私は思
ったの。やっぱり二人だけのパーティじゃ、いつか攻略で失敗して、
駄目になっちゃうって。だから、私はアリアに提案したの。もう一
人、パーティに加えないかって……………」

そこまで言ったテナは、表情を少し曇らせた。

「だけど、アリアは反対したの。その一人のせいで、パーティの連
携が崩れるって言って……………」

そこまで聞いたハヤトは、心の中で首を傾げていた。

確かに、新たなメンバーをパーティに加えると、そのパーティの連携は多少だが崩れる。だが、それも微々たるものであり、まだ完成していないパーティであれば、無視して良い問題だ。

エーレンの学園を卒業しているという事は、この位の判断は出来ると考えて良いだろう。だとすると、何か別の理由があるわけだが……。

「……何だろうな……？」

「……？ 何が？」

ハヤトが思わず零してしまった言葉に、テナは不思議そうな顔をする。「ああ、何でもない」と軽く誤魔化しながら、ハヤトはテナに続きを話すよう、促す。

明らかに不自然なハヤトの行動に、少しの間、首を傾げていたテナだったが、やがて話を続け始めた。

「それで、私とアリアは口論になって、結局、パーティを解散する事になっちゃったの」

「……なるほど。それで、一人で世界樹を攻略するのは危険だから、僕とパーティを組んだと……」

ハヤトの言葉に、テナはこくりと頷いた。

ふむ、と何やら考えていたハヤトだったが、テナに一つ、尋ねた。

「……そのフェルノが、明日の僕たちの攻略に付いてくるのは、どういっつもりかな？」

「うん……。……すみません、私にも良く分らないです」

テナは申し訳なさそうな顔をして、ハヤトに謝ってくる。

「いや、構わない」とテナに言いながら、ハヤトは机に並べられていた料理を本格的に食べ始めた。

× × × × × × × × × ×

テストの宿屋の中。

何とか二部屋取れたため、テナとハヤトは別々の部屋で眠る事にした。まあ当然の事である。

明日の攻略の準備が終わったハヤトは、部屋の隅に設置されているベッドに寝転がりながら、心の中でアリアの事を考えていた。

今日のアリアの立ち振る舞いから想像するに、恐らく貴族の家の出。事実、エーレンの特級区に屋敷を構える貴族の中に、フェルノ家という貴族は存在していたはずだ。

フェルノ家は、世界樹攻略が始まった頃からずっと冒険者のための道具の製作に協力しており、フェルノ家が中心になって製作した道具は品質が良く、冒険者たちの中では評判になっている。

その影響もあって、フェルノ家は貴族の中でもかなり名門の家だ。そんな名家の出身であれば、多数の冒険者が自らの地位の向上を目的に、アリアに近づいてくるだろう。世界樹攻略の確実性を求めるのであれば、そうした近づいてくる冒険者の中から優秀な者を引き抜けば良い。

それが何故、テナと二人でパーティを組んで世界樹攻略をしているのだろうか。

お世辞にも、テナの腕前は悪いとは言えないものの、良いとも言えないそれだ。

だとすると、テナでなければならぬ理由が存在するという事になる。

それに、自分たちの攻略に加わりたいと言い出したアリアの真意は、一体何なのか？

ぐるぐると頭を働かせていたハヤトだったが、やがて大きな溜め息を吐いて、天井をぼんやりと見上げた。

あくまで、これはテナとアリアの問題であり、自分は今日と同じように過ごしていれば良いのだと、結論を出したからだ。

ちょうど良い頃合でやって来た眠気に身体を任せて、ハヤトはゆっくりと目を閉じた。

第四話 再会（後書き）

第四話、如何だったでしょうか。

今回は少し短くなっていました。楽しんで頂ければ、と思います。前書きでも書きましたが、数名の方がお気に入り登録を下さった事に気が付いた作者は、非常にテンションが上がっています。

どうか冷めませんように……！！

では、次回の更新が何時になるのかは未定ですが、楽しみにして頂けると幸いです。

第五話 遭遇（前書き）

こんばんは、作者の吉良義人です。

暇なため、連続投稿をやっています。一週間、いけるかな……？
ところで最近、OLの正式名称がきになりました。

office ladyで良いのかな……？

どうでも良いですね、反省しています。

それでは第五話、よろしく願います。

第五話 遭遇

翌朝、清々しいほどに晴れ渡った青天の下、ハヤトたちはテストの入り口に向かって歩いていった。

世界樹の葉を静かに揺らしながら吹いていく穏やかな風と、雲一つない空から差し込む暖かな日の光が、道行く人の心を明るく開放していくのに対し、ハヤトの心の中は、開放的なそれとは言えなかった。

それは何故か、という問いに持ち合わせている答えは唯一つ。世界樹攻略が、憂鬱な時間となる可能性が高いからだ。

「はぁ……」と大きな溜め息を一つ吐いたハヤトは、テストの入り口に立つ少女の姿を遠目に認める。

その身体には、昨日会った時には無かった鎧を身に付けており、その手には巨大な弓、腰には数多の矢が収められている矢筒が吊るされている。

普通に立っているだけでも優雅に見えるその少女、アリアは、世界樹へと向かっていく冒険者の注目を集めており、ハヤトから急速に声をかける気を削いでいく。

横に立っていたテナの顔を見る限り、それはテナも同じようだ。しかし、その理由までが同じとは限らないのだが。

さてどうしたものかと立ち尽くしていたハヤトたち。だが、そんなハヤトたちに気が付いたアリアは、大きな声でテナたちを呼ぶ。

「やっと来ましたか！ 早く来てください！」

アリアの声のせいで、余計な注目の視線がハヤトたちに突き刺さる。

（あの男、あんな綺麗な娘を待たせているのか。というかもう一人一緒にいるぞ。どういいうつもりだあの野郎！！）とでも言いたげな、敵意の多分に含まれた視線を受けて、かなり居心地悪そうにしながらハヤトはテナを連れてアリアの下に歩いていった。

ハヤトたちが来た事を確認して、アリアは言い始めた。

「……やっと来ましたね。まったく、私をどれだけ待たせる——」
アリアの言葉を遮る形で、ハヤトは呆れたような様子で言葉を重ねる。

「……いや、悪かったとは思っけれど、この仕打ちはあんまりだと僕は思う」

「……？ 何のことですか？」

ハヤトの言葉に、目を白黒させながら首を小さく傾げるアリア。

どうやら本気で自覚が無いらしいという事を思い知ったハヤトは、小さく溜め息を吐きながら、世界樹の方へと歩き出す。

背後からアリアの愚痴がぶつぶつと聞こえてくるが、全て無視して歩き続ける。これは無視しなければ、自分の精神力がもたないと判断したためである。

攻略の始まる前から精神力を削られまくったハヤトは、攻略が無事に終了するのか、一抹の不安を抱いていた。

× × × × × × × × × ×

発光する鉱石や植物によってぼんやりと照らされている世界樹第15層の中。

特に魔物も見当たらず、ただ歩いていくだけの作業が辛くなってきたハヤトは、自分よりやや後ろを歩くテナの方を見る。

テストまでの時は結構積極的に話してきたテナだったが、今は黙りこくっている。テナの後頭部で結われた髪が、心なしか萎れているように見えるのは、ハヤトだけではないだろう。

どうにも、アリアと集合した時から、パーティの間に気まずい空気が流れているようにハヤトには感じられ、どうも落ち着かないのだ。

段々と胃が痛くなってきた頃、ハヤトはアリアの弓に刻まれている、一つの紋章に気付く。

エーレンにおいて大きな勢力を持つ貴族、フェルノ家の家紋に似ているが、少しだけ違うそれは、フェルノ家が中心となって製作された品に刻まれる、一種の証のような物だ。

「その弓、フェルノ家で作られた……」

ハヤトがぼそりと零した言葉に、アリアはしっかりと反応を返してくる。

「はい。あなたの言った通り、この弓はフェルノ家、つまりは私のお父様が中心になって製造した物です」

そう言ったアリアの顔は、何処か誇らしげだ。

余程、アリアの父親の、フェルノ家頭首の事を敬愛しているのだろう。

そんなアリアを微笑ましく思いながら見ていたハヤトだったが、ふと自分の腰に提げられている剣を目を走らせる。

細身な長剣だが、しっかりと幾重にも渡って鍛錬されたため、丈夫な品として完成当初は仕上がっていたそれも、今では幾多もの使用によって刀身が磨り減り、鈍い輝きを放っている。

そろそろ剣も新調しなくちゃなあ……。と考えながら、ハヤトの頭に一つの疑問が浮かんだ。

「……そういえば、フェルノさんはテストまで一人で来たんですよね？」

突然声をかけられたアリアは、不思議そうな顔をしながらハヤトに言葉を返す。

「……？　そうですけど、それがどうかしましたか？」

「……いや、その武装では、テストまで来るのも苦労したんじゃないかなと思ったんです」

ハヤトの視線の先にあるのは、アリアの握っている弓。通常はパーティの後方支援のために使われる武器だ。そのため、弓を持っている者は一人で世界樹攻略をしようとはなかなか思わない。

そう言われたアリアは、軽く苦笑いをしながら、ハヤトに答える。「確かに危険ではありましたが、この辺り程度ならば、警戒を怠

らなければ問題はありませんでしたわ」

さも当然のように答えたアリアだったが、ハヤトはアリアの言葉に目を丸くしていた。

世界樹の中は視界が不鮮明である上、入り組んだ構成をしている所が多いため、常に警戒をしているとなると、尋常ではないほどの精神力を削っていく事になる。

要は、アリアのやってきた行為が普通の人間ならば無茶の類として捉えられるそれだという事だ。

アリアとの話も尽き、再び気まずい空気が流れ出した事を感じたハヤトは、ちらつ、と後ろにいたテナの方を見る。すると、テナは先程見た時よりも、明らかに表情暗くして俯いてしまっている。

まずい話題を出してしまったなあ……。と反省したハヤトは、口を噤んで歩く事に専念する。

その時、低く獰猛な唸り声を上げながら、暗がりの中から8匹程の魔物が現れる。

そのいずれも、二足歩行の狼のような風貌をしており、額の中心に、真紅に輝く魔結晶が埋め込まれている。

「……さて、ようやく魔物が出てきたな……」

「あなたの實力、見せてもらいますよ。シラキさん」

魔物が出てきたにも関わらず、ほっ、としたような息を零したハヤトは、ゆっくりと腰の剣を抜き、中段に構える。そのハヤトと並ぶ形でテナも出てきて、剣を構える。

アリアは背中を壁に預ける形になるように後退する。

弓という武器は「防御」という手段が使えないため、その立ち回りは相手を一切近づけないか、相手の攻撃の全てを避けきるかのどちらかとなる。

今回、アリアは相手を近づけない、という戦い方をする事にしたのだろう。

魔物たちは一斉に飛び掛ってこようとするが、アリアが矢筒から引き抜き、流れるような動作で放った矢が、額に埋め込まれている

魔結晶に命中。砕かれはしなかったものの、魔結晶は欠け、魔物は大きく仰け反る。

その大きな隙を見逃さず、アリアは続けざまに三本の矢を射て、その魔物に止めを刺す。

「おお……」

アリアの弓の腕前に、ハヤトは感心したような声を上げるが、他の魔物が飛び掛ってきたため、それに対処せざるを得なくなる。

ハヤトを斬り裂こうと、鋭く迫ってくる魔物の爪を、一旦後退する事で避ける。そして魔物が体勢を立て直す前に、身体全身を使った突きを、魔物の中心を目掛けて放つ。

ハヤトの、全体重をかけた突きは、魔物の腕を貫き、胸を貫通させる。

そのままの勢いでその魔物に体当たりを食らわせたハヤトは、後ろの方へと倒れこんでいく魔物の動きに合わせて、剣を引き抜く。

倒れた魔物は、魔結晶は砕かれていないものの、身体に大きな穴が空き、もはや戦闘不能状態だ。

テナの方は何やら手こずっていた様子だったが、アリアの援護射撃もあつて無事に倒せたようだ。

いきなり仲間を三匹も殺された魔物の方は、さすがに警戒をあらわにするが、それはもはや手後れと言つて良いほどだった。

アリアは一気に矢を射て二匹を始末する。そしてハヤトとテナは、混乱している魔物を一匹ずつ始末した。

仲間を全て殺され、魔物は恐れをあらわにして逃げ出そうとするが、アリアが放った矢に背中を射抜かれ、地に倒れた。

「……ふう。これで全部片付いたか」

戦闘不能状態ではあるものの、魔結晶は砕かれていなかった魔物の魔結晶を砕いて歩きながら、ハヤトは小さく溜め息を吐いた。

全ての魔結晶を、必要最低限の力で砕いたハヤトは、まだ固体として残っている魔結晶を拾っていく。少しでも固体として残っていれば、街に着いた時に高値で売り払う事が出来るからだ。

魔結晶の欠片を拾い終わったハヤトは、立ち上がってテナとアリアの様子を伺う。

すると、魔物との戦闘以前まで流れていた、気まずい空気が再び流れ出していた。

テナは暗い表情で俯き、アリアはテナの方をちらちらと見ている、という状態だ。

小さな溜め息を吐いたハヤトは、「もう行こうか」と二人を促し、足早に歩き始めた。

× × × × × × × × × ×

世界樹第21層の中。ここをもう少し歩いていけば、世界樹の枝の上に設立された都市の一つ、カナレアに到着するという所である。前を歩いていくハヤトの姿を見ながら、アリアはずっと心の中でテナの事を考えていた。

何度もテナに話しかけようと心の中で決心し、そして声をかけようとするが、ちょうどその時にハヤトが現在地を確かめてくる。それに答えているうちに、テナに声をかける機会を失い、そしてまた心の中で決心して――、繰り返しが延々と続いている。

そもそも、テストでテナたちと再会した時に「世界樹攻略に同行する」などと言い出したのも、その場の勢いに似たようなもので、後から考えてみても、何故そんな事を言ったのが思い出せないのだ。

だが、この世界樹攻略の間に何らかの行動を起こして、テナとの関係を変えなければならない、という気がしていた。

再び、テナに声をかけようと決心したアリアは、口を開きかけるが、

「……おっ？ 明かりが見えてきたぞ……」

ハヤトの言葉に、思わず開きかけていた口を閉じて前の方を確認してしまう。

いつの間にやら大きな広間のような所に出ており、確かにハヤトの言う通り、先の方に小さな明かりが漏れてくるのが分かる。

それを確認した途端、ハヤトの歩く速度が少しばかり速くなった。やはり、外に出られる、という事は大きいのだろう。

いつもなら、自分もそれに便乗して足早に抜けていきたいところなのだが、今回は訳が違った。

世界樹から抜ける事よりも、テナとの関係の修復を早急にこなすべきだと、心は言っていた。しかし、一体何を言えば良いのかが、さっぱり分からなかった。

そうこうしている間に、明かりはどんどん近づいてくる。

とりあえず、行動だけでも起こしておくべきだと判断したアリアは、口を開く。

「あ——」

「……止まって」

が、一言も言えぬままに、ハヤトに言葉を重ねられる。

ハヤトに反論を返そうとしたアリアだったが、とある事態に気がついた。

外へと繋がる明かりだが、そのすぐ脇の暗がりには潜むような形で、何かがあるのだ。そして、その何かからは途轍もなく嫌な予感が感じられた。

自然と、弓を握っている左手には力が入り、右手は矢筒の方へとのびていた。

ハヤトとテナも腰の剣を抜き、構えながらじりじりとその何かへと近づく。

その時、その何かは動き出し、そして外からの明かりに照らされるような形で出てきた。

「……………っ!？」

思わず息を呑んだハヤトたちの前に出てきたそれは、全てを飲み込むような漆黒の鎧を纏った大柄な戦士だった。

いや、その身体に纏っている気配は、明らかに人の持てるそれで

はない。恐らくは、人間の戦士と同じような形をした魔物なのだろう。

漆黒の鎧は、その魔物の身体全てを覆い隠し、異様な雰囲気を与えている。そして、魔物の手には巨大な両手剣が握られていた。刃渡りはハヤトの身長以上はあると言え、その刀身の放つ濁ったような鈍い輝きは、その剣に獰猛で凶暴な印象を与えていた。

「……………」

その魔物は唸り声一つ上げず、更には息をするような音さえも聞こえてこない。

明らかに他の魔物とは一線を画する雰囲気を感じているそれに、ハヤトたちは背中に嫌な汗を流す。

「……………これは、本格的に危険だぞ……………！」

ハヤトの言葉を合図にしたかのように、その魔物は剣を身体の前で構えた。

第五話 遭遇（後書き）

『第五話 遭遇』、如何だったでしょうか。

個人的には、テナの台詞が少なくなった事が気になっているのですが……。

……大丈夫かな……？

感想や批評その他諸々、お気軽に書き込んでください。

それでは、また次回の更新もよろしくお願いします。

第六話 黒戦士（前書き）

こんにちは、作者の吉良義人です。

連続投稿五日目（？）に到達しました。

今回は書くのにすごく抵抗のあるシーンを書きました。

……上手く書けている自信が、全くありません。

……大丈夫なのかな……？

それでは『第六話 黒戦士』、よろしくお願いします。

第六話 黒戦士

巨大な剣を抜き構えた魔物に、身がすくみそうな程の恐怖を感じながら、ハヤトは剣を向ける。

「先手必勝です！」

そう言うが否や、アリアは素早く矢を手に取り、魔物の顔面に向けて射る。しかし、

「……おいおい……」

「……手で……掴んだ……？」

魔物は、高速で迫ってきた矢を前に動じる事なく、あろう事か、その矢を剣を握っていない左手で掴み取ってしまったのだ。

魔物はその矢を脇に投げ捨て、再び剣を構える。

「……テナ、僕があいつの気を逸らすから、その間に攻撃を仕掛けるんだ。フェルノさんはテナの援護を頼む」

そう言い、ハヤトは一気に魔物へと接近していく。

後ろからテナも接近してくるのを感じながら、ハヤトは魔物に向けて、剣を横向きに薙ぎ払う。

明らかな殺意の籠もったその斬撃を、魔物は剣で受け止め、そして押し返す。

魔物の馬鹿げた力に押し返され、体勢を大きく崩されたハヤトは、魔物が追撃を加えるべく、拳を固めて繰り出そうとしているのが見える。

「……まずっ!？」

無理矢理体を横に飛ばして、それを避けようとするも、間に合わない。

空気を切り裂きながら迫る魔物の拳を目の当たりにし、来るであろう衝撃に備えて身体を固くしたハヤトだったが、その腕をテナに掴まれ、引っ張られる。

放たれた魔物の拳は、ハヤトが直前までいた空間を貫くが、ハヤ

トの身体には当たらなかった。

結果、何とか魔物の拳を避けたハヤトだったが、テナと一緒に地面に倒れこむ。

倒れこんだハヤトたちを見た魔物は、右手に握っていた巨大な剣を両手で掲げ、振り下ろそうとする。が、後ろから飛来した矢に、鎧の節目を狙撃され、後ろを振り返る。

後ろを振り返った魔物の目に入ってきたのは、不敵な笑みを浮かべているアリア。

「どうかしましたか？ 早くかかって来なさい」

そう言っただけ魔物を挑発しようとするアリアだったが、その顔には嫌な汗が流れている。

先にアリアを片付けてしまおうと考えたのか、一歩踏み出そうとした魔物だったが、上げた足を、後ろから倒れている状態のハヤトに蹴り飛ばされ、大きく前に片足だけを出してしまう。

後ろで転がっていたハヤトの方を見ると、既にテナと共に立ち上がっている。

「ここは一旦引こう！ 大勢を立て直すんだ！」

そう言っただけ、一目散にハヤトは部屋を抜ける道へと駆け出す。

後ろから付いてくるテナとアリアの気配を感じながら、ハヤトは喉の方に塩辛いような敗北の味を感じていた。

× × × × × × × × × × × ×

「……はあ、はあ……。何なのですか、あの魔物は！？」

もう魔物の影も見えなくなるくらいの場合まで走ったハヤトたち。荒れた息を整えながら、アリアは不満を吐き出すように叫んだ。

「……っ。本当だよ……。ただ、カナレアに行くんだったら、あいつは倒さないといけないよな……」

それに同意するように、ハヤトは疲れた様子を表しながら言い、更に言葉を続ける。

「僕としては、この後はテストまで引き返したい——」

「当然です。またあの魔物と戦うのは、命取りだと思います」

ハヤトの言葉に重なるように言ったアリアに、苦笑いを浮かべながら、ハヤトは言った。

「……そうしたいんだけど、問題がありましたね……」

「……？ 何かありましたか？」

ハヤトは腰に提げてあった袋から地図を取り出す。そして、小さな声で言った。

「……… 現在位置、分かります？」

ハヤトの言葉に、アリアはたつぷりと時間を使って硬直する。そして、急いで自分も腰に提げてあった袋から地図を取り出し、確認する。ちなみに、ハヤトの持っていた地図は、昨日までテナの持っていたそれだ。

「……多分、この辺りではないかと……」

自信なさ気に言うアリアの持つ地図を横から見て、アリアの指差す地点を見るハヤト。しかし、

「……僕は、この辺りだと思っていたんですけど……」

とやはり、自信なさ気な様子で、アリアの地図の一点を指差す。アリアの指差した所と、ハヤトの指差した所。それは、互いに大分離れた所にあった。

「………」

ハヤトとテナとアリア、揃いも揃って沈黙する。

「あ、さっきの魔物がいた部屋に行ってから、元の道に戻っていけば……」

「……それだ……」

そのテナの言葉に、眼を輝かせたハヤトとアリアは、その魔物にいる辺りに目を走らせる。しかし、

「……何でこんなに道があるのですか……」

「……これでは、正しい道を見つけている間に、あいつにやられてしまいますね……」

その魔物のいた部屋からは、無数に道が延びているのだ。ぱつ、と見るだけでも、20以上はあるだろうか。更に、その道が繋がっていた所からは、また無数に道が延びている。

かなりの正確さを誇るその地図だったが、世界樹内部のぼんやりとした明かりでは、どの道が正しいのか、という事を調べるだけで一苦労だ。

目の前がどんどん暗くなっていく事を感じながら、ハヤトはとある話を思い出していた。

世界樹第21層では、いかなる危機に直面してもやってはいけな
い事がある。

それは、自分の通った道を確認もせず、ただひたすら走り続ける、
という事だ。

そして、先程の自分たちの行動を思い出す。

魔物から少しでも離れようと、道を確認しようともせず、ただ必
死に走り続けていた。

……何て事をしていたんだ、僕は……！！と、自分の行動を悔
いるハヤトだったが、いつまでもそうしていても仕方が無い。これ
からの方針を決めるべく、テナとアリアに話を振る。

「……それで、僕たちの出来る事は二つ。ここで野宿して、明日力
ナレアから出てきた冒険者と一緒に魔物を倒すか。それとも、僕た
ちだけであの魔物を倒すか」

ハヤトの言葉に、テナとアリアも真面目な顔になる。

「……どうする？」

そして続けられたハヤトの言葉を聞き、アリアは迷うような表情
をしている。しかし、

「……私は、カナレアまで行きたい」

テナが小さく、しかしはっきりとした声で零した言葉に、アリア
は驚きを隠せず、テナの方を見る。しかし、テナはそれに反応せず、

自分の考えを述べていく。

「……確かに、あの魔物は強かったけど、倒せないほどじゃないと思う。それに、世界樹の中で一晩過ごすのは、あの魔物と戦う以上に危険な気がする」

テナの言葉に、ハヤトは「もつともだ」と呟く。

世界樹の魔物は、神出鬼没の存在だ。

出現する予兆などという物は存在しないし、何処に現れるかも分からない。そもそも、どうやって出現しているのかさえ判明していない。

一応、世界樹の中で野宿も出来る事には出来るが、行うには相当の人数の冒険者が必要となってくる。

いくら冒険者としての訓練を積んでいるからといって、一日以上不眠不休で警戒を怠らない、などという事は出来ないからだ。

テナの言葉を聞き終わったハヤトは、ゆっくりと言った。

「……というわけで、カナレアの方に強行突破する事になったけど……」

そこまで言ったハヤトは、アリアの方を確認するように見る。

「……良いかな？ フェルノさん」

ハヤトに尋ねられたアリアは、小さな溜め息を一つ吐き、諦めたような口調で「分かりました」と言った。

それを確認したハヤトは、テナとアリアに、新たな話をする。

「それで、あの魔物の倒し方についてなんだけど――」

テナとアリアに向けて話しながら、ハヤトは感じていた。

魔物との戦闘前まではあった気まずいような空気が、今では殆どなくなっている事に。

やはり、共通の大きな敵と出会った時は、好ましくない者が相手でも、手を取り合うのだろう。そして更に良い事に、本人たちはその事を特に意識していない様子だ。

ハヤトは、場違いだが一種の安心感のような物を感じ、少しだけ心が軽くなる。

テナたちに戦いの方針を話し終えたハヤトは、ゆっくりと魔物のいた方向へと歩き出した。

× × × × × × × × × ×

カナレアの街を目前に控えた所まで来たハヤトたちは、やはりそこに立っていた魔物の姿を目にする。

巨大な剣は地面に垂直に突き刺し、魔物は穴を塞ぐような形で仁王立ちしている。

魔物からの不気味な圧力を全身に感じながら、ハヤトたちはそれぞれの得物を手にとり、構える。それに反応する形で、魔物も組んでいた腕を解き、両手で剣を抜いて、構えた。

「……行くよ！」

掛け声を上げ、ハヤトは一気に魔物へと接近するべく、駆け出す。そのハヤトを援護するように、アリアの矢が幾つも飛んでいく。

アリアの矢は、一気に魔物へと迫るが、その全てが鎧に阻まれ、弾かれる。が、これはあくまでも牽制だ。

ハヤトは魔物の目の前まで来ると、そこまでの走りの勢いの乗った突きを、魔物の胸目掛けて繰り出す。さすがにハヤトの突きを直撃するのはまずいと考えたのか、魔物はハヤトの突きの軌道上に剣を置き、突きを受け止める。

突きを受け止められ、ハヤトの腕に尋常ではないほど大きな衝撃が襲い掛かる。

「……っ！」

腕に走った凄まじい痛み、ハヤトは顔をしかめるが、魔物の反撃をかわすため、大きく後ろに飛びずさる。その直後、ハヤトのいた所を魔物の拳が貫いた。

魔物の隙を突くように、アリアから矢が飛来し、テナも渾身の突きを見舞った。

アリアの矢を鎧で弾き、テナの突きを腕で逸らした魔物は、その

ままテナに拳を打ち出そうとする。そのテナへの攻撃を阻害すべく、ハヤトは剣を下段に構えた状態で突進する。

攻撃を中止し、剣でハヤトの突進を止めた魔物は、剣を押し出してハヤトの体勢を崩す。そしてそのまま拳を繰り出そうとする。しかし、ハヤトを支援する形で飛来した矢から防御するため、その攻撃を中止する。

その間に、ハヤトとテナは魔物から距離を取り、息を整える。

「……何とか、戦えているな……」

ハヤトの零した言葉に、テナは同意するようにこくと頷いた。息を整えた二人に、後ろからアリアが声をかける。

「まだ大丈夫ですけど、矢の本数には限りがある事を忘れないで下さい!!」

「うん、分かった!」

テナはそう言葉を返すのを聞きながら、ハヤトは再び、魔物に向かって駆け出す。

それを見た魔物は、手にしていた剣を握り、半身になって剣を後方へと引く。機会を合わせて、ハヤトの身体を薙ぎ払うつもりなのだろう。

それに対し、ハヤトは魔物の剣がぎりぎり届く距離まで来ると、今度は反転、後ろへと飛びずさる。それに合わせるように飛来した矢が、魔物の鎧の節目に刺さっていく。

魔物と闘い始める前にハヤトが言った、戦いの方針。それは、攻撃を一度やったら、すぐに引いて体勢を直し、再び攻撃する。それを繰り返すという、ごく単純なものだった。

もう何度目かは覚えていないが、体勢を立て直し、再び剣を構えたハヤトは、魔物の動きが若干鈍くなっているのを見た。魔結晶には一度も当たっていないが、身体に刺さった幾つもの矢や、ハヤトとテナの攻撃は確実に、魔物の体力を奪っているのだろう。

動きがどんどん鈍くなっていく魔物に対し、ハヤトたちは勝利の兆しが見え始め、更に攻撃を苛烈なそれにする。

勝利の兆しが見えたそれは、ハヤトたちに大きな希望を与えた。だが同時に、軽い油断をも誘った。

ハヤトは、見えてきた希望に力を漲らせながら、再び魔物への攻撃を行う。攻撃を魔物に防御され、また後ろへ飛びずさったハヤトは、次の瞬間、驚きの光景を目にした。

テナの突きを見殺して、魔物が突然、飛びずさったハヤトに向けて手にしていた巨大な剣を投擲したのだ。

「——うおっ!？」

無理矢理身体を大きく捻り、剣を避けようとするハヤト。

しかし、剣は空気を斬り裂きながら大きく回転し迫る。

「ぐっ!」

幸い、剣の柄がハヤトの左肩を痛打するに留まったものの、ハヤトの左肩には鈍い痛みが走る。だが、動かせないほどではなかった。しかし、

「……えっ?」

大きく回転しながら飛んでいく剣の軌道上には、弓を構えながら大きく目を見開くアリアがいた。

恐らくはハヤトの姿と剣が重なり、剣が飛ばされたのが見えなかったのだろう。

空気を斬り裂き、高い音を上げながら高速で迫ってくる剣に、アリアはなす術無く、ただ見つめているしか出来ない。

「避けてアリアっ!!」

テナが悲鳴のような声を上げるが、もう剣は避けられるような距離にはない。

そしてハヤトは見た。

剣がアリアの肩を大きく斬り裂き、赤い花のように真紅の鮮血を辺りに飛び散らせたのを。

剣は赤い飛沫を撒き散らしながら飛んでいき、地面にその先端が突き刺さる。

そして、アリアは剣の勢いに押され、後ろに飛ばされ、そして地面に叩きつけられた。

「……嫌……」

テナの口から、小さく言葉が漏れ、そして

「嫌ああああー！！！」

今度は紛れもなく、断末魔のような大きな悲鳴が上がった。

第六話 黒戦士（後書き）

『第六話 黒戦士』、如何だったでしょうか。

どうでも良い事ですが、僕はヒロインが傷つく描写を書く事にももの凄く抵抗があります。

……主人公なら、全然構わないんですけどね……。

毎回書いている事ですが、気になった事、感想、批評などは大歓迎ですので、お気軽に書いてください。

それでは、次回の更新もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0338ba/>

世界樹のはやぶさ

2012年1月8日23時48分発行